河口浅間神社

河口浅間神社は、864 年の貞観大噴火の後に浅間 (あさま/せんげん) と知られる火山の女神を鎮めるために建立されました。 富士山に捧げられた浅間神社は、その 1 世紀以上前には富士山の南側に存在していましたが、864 年の[大噴火の際に]激しく破壊されたため、朝廷が新しい神社を北側に建立するよう命令したのでした。富士山に対峙しつつ間に河口湖を挟む場所が選ばれた理由のひとつは、その後に噴火があった場合にもこの神社を守れるようにというものがあります。

河口浅間神社は、御神木がずらりと並ぶその参道で有名です。また、この神社の境内にはこの神社が建立される前から立っている、樹齢 1,200 年を超える御神木の七本杉があります。

19 世紀初頭、河口浅間神社は、その他の浅間神社とともに山の神、大山津見神の娘である花の女神、木花開耶姫命を祀るようになりました。この花の女神の孫、鸕鷀草葺不合尊 (ウガヤフキアエズノミコト) は、産屋ヶ崎の末社で祀られています。これら 2 社の神社では、4 月 25 日の「孫見の日」という、孫を見る日を祝い、この祭りでは木花咲耶姫命が鎮座する神輿で産屋ヶ崎の孫のお産見舞いに行くという儀式が行われます。

稚児の舞 - 子どもの踊り

河口浅間神社の建物は割拝殿形式です。浅間神社に特有の 2 棟の本殿が同じ屋根の下に設えられた土間の広間で分けられています。この神社では、この広場が伝統的な稚児の舞に使われています。

稚児の舞は、伝統的な衣装を身に着けた地元の 7 歳から 12 歳までの女児が舞を奉納する儀式です。この舞は、毎年 4 月 25 日の「孫見」の儀式の前と、7 月 28 日の太々御神楽祭の 2 回上演されます。